

## シュンペーターのレトリック

塩野谷 祐一

(財団法人 家計経済研究所 会長)

レトリックは修辞学である。話したり書いたりする際に、他人を説得し他人に影響を与えるように言葉を有効に用いる技術と定義される。古代ギリシャ以来、学問の一分野として重要視されてきた。ただし、レトリックによって伝えられる知識は、科学の客観的知識（エピステーメ）と異なり、主観的な憶測・信念・思いこみ（ドクサ）に属する。

レトリック批判としては、レトリックは扇動政治家（デマゴグ）を育てるものだというプラトンの攻撃が有名である。近代経験論の元祖である哲学者ジョン・ロックは、レトリックは「誤謬と欺瞞の強力な道具」であり、「誤った考えをたきつけ、感情に訴え、判断を誤らせるというまったくのまやかしである」と非難した。

レトリックには、一つの文章を気の利いた語句によって修飾する「文彩のレトリック」と、一つの思想を表現する「構想のレトリック」とがある。文学の世界では、魅力あるレトリックは貴重であり、弊害はない。思想の世界ではどうだろうか。正しい知識を使うことができれば、それに越したことはない。しかし、一般通念を打破する新しい着想や、困難な問題に接近するためのヴィジョンはレトリックに頼らざるをえない。

この点で卓越したレトリックの経済学者はシュンペーターである。彼はヴィジョンをレトリックによって人々に伝え、見逃されている問題の研究に人々を誘ったのである。彼は逆説・隠喩・対比などの技術を使って、構想のレトリックを展開した。しかし、人々は彼の逆説に悩まされることに

もなった。いくつかを紹介しよう。出所は煩瑣であるので省略する。

「もし私が経済学の勉強を新たに始めようとするとき、三つの科目（理論・統計・歴史）のうち、ただ一つのものしか選択することができないと言われたなら、私が選ぶのは歴史である。」彼は理論経済学者とみなされていた。しかし、実際は歴史学や社会学を取り込む大きな学問を考えていた。

「本格的な経済理論の内部には、『学派』や原理の相違といったものは存在しない。近代経済学における唯一の根本的な区別は、良い仕事と悪い仕事との間にしか存在しない。」「学問の歴史は、人間の精神の作用を明らかにする素晴らしい学問である。科学的学派と呼ばれる集団の現象は第一義的な重要性を持っている。」この二つの文章は、普通の人には矛盾するように見える。しかし、前者は科学哲学上の命題であり、後者は科学社会学上の命題である。

「静態的封建主義は依然として封建主義経済であり、静態的社会主義は依然として社会主義経済である。しかし、静態的資本主義は言葉の矛盾である。」資本主義の本質は発展であるという。

『「経済発展の理論」を書くに当たって私が意図したことは、時間を含む経済変化の過程に関する理論モデルを構築することであり、もっとはっきり言えば、経済体系はどのようにして不断にみずからを变革する力を生み出すかという問いに答えることであって、このことは、二人の偉大な人物の名前、ワルラスとマルクスを引き合いに出すことによって説明できよう。』

この最後の文章は、シュンペーターの日本語版の序文からとったものであるが、まったく異なるワルラスとマルクスを受け入れることの矛盾を批判する声が絶えない。しかし、これは矛盾でも何でもない。ワルラスの一般均衡理論は、経済の適応メカニズムを初めて明らかにしたものであり、マルクスの史的唯物論は、経済発展が社会体制を変えていくという進化のメカニズムを初めて明らかにしたものであり、両者があいまって経済の変化と適応のプロセスが完成する。

「沢山の郵便馬車をいくらつなぎ合わせても、鉄道を作り出すことはできない。」イノベーションは旧来の技術の発想を超えたところに生ずるという。

「企業者は経済領域における行為の人である。彼は経済の指導者であり、真の指揮官である。静態的経済主体のような見かけだけの指揮官とは違う。」利潤ではなく、革新の達成感を求めてイノベーションを起こす人が、指導者と呼ばれる。シュンペーターはあらゆる領域の指導者を問題にした。

「企業者は無趣味な考え方や功利主義の先駆者であり、ピフテキと理想とを初めて共通分母の上に並べる力と機会を持った頭脳の持ち主である。」企業者は立派な人格者である必要はない。異端の精神と強固な意志と実行力を持っていけばよい。

「イノベーションに基づく競争は他の種の競争と比べて、はるかに効果的である。手で扉をこじ開けるよりも、砲撃の方が効果的であるのと同じである。」「資本主義の典型的な業績は、女王のためにより多くの絹の靴下を提供することにあるのではなく、労働量を着実に減らすことによって、絹の靴下を女工の手に届けたことにある。」市場メカニズムは需給の調整をするだけのルーティンの秩序にすぎない。資本主義のメリットは、革新を引き寄せ、その成果を大衆に広めることにある。

「自動車はブレーキを備えているために、そうでない場合よりも早く走ることができる。」イノベーションはさし当たって企業の独占的地位によって守られるが、これを教科書的な考えに立って非難してはならない。完全競争の世界では、イノベーションは起こらないだろう。

「資本主義のゲームはルーレットのようなもので

はなく、ポーカーのようなものだ。賞金は、仕事に対する才能と精力と並外れた力量を持つ人に与えられる。」並外れた人材は限られている。資本主義はそれを育成し利用する報奨の制度である。

「世界恐慌は資本主義の崩壊を証明するものではない。それとは何の関係もない。恐慌は体制の弱点や失敗の兆候ではない。むしろ、資本主義的発展の力強さの証明である。」景気変動はイノベーションの導入の反動によって生ずる。それは心臓の鼓動、潮の満干と同じようなものである。

「資本主義の過程は、それ自身の制度的枠組みを破壊するばかりでなく、次の枠組みのための条件をも作り出す。」「社会主義の真の指導者は、社会主義を伝道した知識人や扇動者ではなく、ヴァンダービルト、カーネギー、ロックフェラーらの一族であった。」

シュンペーターの著名な命題は、資本主義は失敗によって崩壊するのではなく、その成功のゆえに崩壊するというものである。その経済的成功が人々の意識を含む環境の諸条件を変え、資本主義にとって敵対的環境を作り出すからである。それによって生み出される次の体制を、シュンペーターは社会主義と呼んだが、名前はどうでもよい。外見は依然として資本主義のように見えるけれども、もはや個人の創意に根ざした英雄的ロマンスの体制ではないという点が重要である。

イノベーションは、旧来のルーティンを破壊しようとする個人の創意による。資本主義の経済体制が崩壊するのは、そこではイノベーションがルーティンと化してしまうからである。革新を起こす人材は、つまらなくなった経済から他の分野に逃げていくのではないかと、というのが彼の結論である。これはまさに体制的規模の逆説である。政策によってイノベーションを喚起しようとする政府の考えほど、シュンペーターの理論から遠いものはない。

しおのや・ゆういち 財団法人家計経済研究所 会長・一橋大学名誉教授。経済哲学・経済思想史専攻。